

〈論 文〉

アメリカ大統領と権力犯罪 ——ウォーターゲート事件を中心に——

坂 出 健*

I はじめに—「WH・HH」とは誰か？

「WH・HH」。1972年6月18日，ウォーターゲートホテル民主党全国委員会委員長ラリー・オブライエン居室への侵入犯キューバ人バーナード・ベイカーが警察に押収されたブルーのアドレスブックにはこのイニシャルと電話番号が記録されていた（Address Book of Watergate Burglar Bernard Barker, Discovered in a Room at the Watergate Hotel; 6/18/1972; Records of District Courts of the United States, Record Group 21. [Online Version, <https://www.docsteach.org/documents/document/address-book-of-watergate-burglar-bernard-barker-discovered-in-a-room-at-the-watergate-hotel>, June 3, 2019）。アドレス帳を押収したFBI（連邦捜査局）捜査官は記された電話番号からホワイトハウス（大統領官邸）に連絡を入れ，「WH・HH」の電話番号がホワイトハウスに個室と直通電話をもつハワード・ハントであると確認し，「ハワード・ハント主犯」のウォーターゲート事件が始まる。ただし，注意深い読者は，この事件に関連するもう一人のHHに思い至るであろう。「世界の半分の富をもつ男」謎の大富豪ハワード・ヒューズに。ハイアムの説明によると，ニクソンとヒューズは当時，民主党全国委員長ラリー・オブライエンが握っていたかもしれない秘密に怯えていた。1968年大統領選でヒューズから資金を受け取り，その後，ヒューズと手を切っていたオブライエンは，ヒューズ資金の秘密を知りすぎただけに最も危険な男であった（Higham ([1993] 1994: 282)）。

アドレス帳の「H」のページにあった「HH・WH」からハワード・ハントを推理したFBI捜査官の慧眼を称えるべきか，あるいはハワード・ハントを主犯に祭り上げることで一躍ジャーナリズムのスターダムに上り詰めた『ワシントン・ポスト』記者ボブ・ウッドワードの黒幕「ディープ・スロート」の狡猾さに目がゆく。本稿は，ハント自身渦中・控訴中に出版した『アンダー・カバー（カバー・ストーリー（でっちあげ）の裏側）』からこぼれたキーワード「ピッグス湾（The Bay of Pigs）」を手掛かりに二人の「HH」の謎を解いていこう。なぜ，この「ピッグス湾」という隠語をニクソンがCIA長官ヘルメスに仄めかしたことを記録していたテープが，ニクソンのウォーターゲート事件でのスモーキング・ガン（「発砲直後の煙が出ている銃」転じて「決定的証拠」）となり，史上初の現職大統領辞任の主たる原因となったか？

このウォーターゲート事件の謎の解明は，その前後のもう二つのアメリカ戦後史の大事件—ケネディ大統領暗殺とロッキード国際疑獄—と深層で深く結びついている。本稿は，戦後のアメリカ現職大統領に関わる権力犯罪—ウォーターゲート事件（1972～74年）—と，日本現職首相に関わる

* 京都大学大学院経済学研究科准教授

権力犯罪・ロッキード事件（1976年）を、ウォーターゲート事件の主犯とされるハワード・ハントと「影の黒幕」大富豪ハワード・ヒューズという「二人のハワード」に着目しつつ、解明する。

読者には、この三大事件（ケネディ暗殺・ウォーターゲート事件（ニクソン大統領再選支持派工員（通称『鉛管工』）^{フランパース}）が、1972年6月17日に、ワシントンDCウォーターゲート・ビル民主党全国委員会本部に盗聴器を仕掛けるため侵入・逮捕された事件、および1974年8月9日にニクソン大統領が辞任するまでの一連の政治劇）・ロッキード事件が、それぞれ別の政治事件ではなく、相互に関連した一連の複合犯罪としてとらえる必要があることに注意喚起されたい。これらの事件は、いずれも、キューバを筆頭とする「アメリカの裏庭」中南米の共産化とベトナム戦争という米ソ冷戦下における「熱戦」の戦跡であった。筆者は、前々稿「ロッキード事件とトライスター計画（1968-1981年）」で、ロッキード事件の経済的背景を、前稿「軍事と経済の三階層（国家・地域・国際）—マクナマラ国防改革とF111戦闘爆撃機計画・C5A輸送機計画を中心に—」で、ケネディ暗殺の原因の一つの仮説である、軍産複合体とケネディ政権の国防改革の対立の構図について考察した。本稿では、ケネディ暗殺とロッキード事件の結節点であり、残る案件であるウォーターゲート事件を検討し、アメリカ戦後史・現代史の謎を、とくにベトナム戦争をめぐる保守とリベラルの衝突の視角から紐解くものである（坂出（2017）；坂出（2019a））。

日本におけるロッキード事件研究においては、アメリカ上院多国籍企業小委員会委員長フランク・チャーチが公聴会で1976年2月4日に突然ロッキード社の日本政府高官への賄賂を暴露したととらえている。しかし、この公聴会も、ベトナム反戦を掲げるリベラルの旗手チャーチが、同時に、アメリカの二大諜報機関CIAとFBI調査委員会委員長として、特にチリ・アジェンデ政権転覆へのCIAの関与を調査していたことからすると、ロッキード事件は冷戦下のCIAの活動全体をめぐる問題と深く関わっていたと考えざるを得ない。また、ケネディ暗殺も、暗殺直後のウォレン委員会の結論「オズワルド単独犯行説」によって終結した問題ではなく、1970年代後半において、1977年に米下院ケネディ暗殺問題調査特別委員会が設置されたようにアメリカ政局のオン・ゴーイングな政治問題であり続けたのである。

多岐にわたる本稿の課題をこの視角からクリアー・カットするために、三つの事件のエッセンスを「三つの謎」として整理しよう。まず、ケネディ暗殺は、もとより「誰が犯人か？」という謎については、事件以来アメリカ国民が繰り返し、細部に渡って議論してきた点であるが（アメリカではケネディ暗殺についての本がすでに600冊以上出版されており、現在なお毎年数十点が出版される）、本稿の主眼である、他の二事件との関連で、特にベトナム戦争との関連で、「ケネディ大統領にベトナム戦争の開戦責任があるのか？」という謎を提示したい。ケネディはなぜ暗殺されたのか？ この問いは、果たして、ケネディは大統領として、アメリカをベトナム戦争に踏み込むように舵を切ったのか、撤退しようとしたのか？ というアメリカ戦後史の隠された大問題と深くかわる。さらには、この謎は、ケネディが暗殺された1963年11月までの期間にとどまる問題ではなく、1960年代から70代前半にかけてのアメリカのベトナム戦争への介入か？ 撤兵か？ という国内世論を二分する争点として、アメリカ政治の中心問題であり、ウォーターゲート事件とも深くかわった問題であった。ベトナム戦争をめぐるニクソン政権と反戦を掲げるリベラルの対立は頂点に達していた。その対立は鋭くベトナム戦争の起源—ケネディ政権がベトナム戦争を始めたのかどうか、にかかっていた。

1961年4月15-19日のグアテマラで軍事訓練を受けた亡命キューバ人によるCIA主導の軍事作

戦は無惨な失敗に終わった（第一次キューバ危機）。事件後、アレン・ダレスはCIA長官を引責辞任した。しかし、軍部・CIAはなおもキューバ・カストロ政権打倒、ベトナムへの軍事介入を望んだ。対して、ケネディは、第二次キューバ危機（全面核戦争危機）での米ソ緊張緩和を経て、ベトナムへの軍事顧問団派遣を超えた軍事的介入への慎重姿勢を明確にしていた（落合（2013: 260-261）; Prouty（2011: 128-132））。

第二の謎は、なぜニクソンはウォーターゲート侵入・盗聴事件を指示したのか？ この過程で大富豪ハワード・ヒューズが関与したのかという謎である。「なぜ、ニクソンは、ウォーターゲート・ビル（民主党全国委員会）に『鉛管工』（ウォーターゲート襲撃チーム）を侵入させたのか？」オプライエンは三つの秘密—①ハンク・グリーンズパン襲撃未遂事件（『ラスベガス・サン』発行者ハンク・グリーンズパンが、民主党の有力大統領候補エドモンド・マスキー（大気汚染防止法であるマスキー法で著名）がカストロから資金を得ている疑惑についてネタを握っている可能性（*Hunt, E. H. (1974: 194)*）、②ディータ・ベアード—ITT事件（ヒューズとCIAのフロント企業であるITTの共和党全国大会（カリフォルニア州サンディエゴ）への資金提供問題）、③ヒューズ・ニクソン・ローン（ニクソンの弟ドナルドが、ヒューズ工作機械から20万5千ドルをはば無担保のローンで借りていた疑惑）をつかんでいるか？ ヒューズとニクソンはパニックになっていたとハイアムは論じている。

「ニクソンのアメリカ」とは何だったのか？ ジャーナリスト松尾文夫の問いは、大統領退陣後もアメリカの分裂の象徴であり続けるトランプ現象のプロト・タイプとして、また、言論の自由に基づく民主主義を国是とするアメリカに刺さった棘であり、少なくとも911同時多発テロ事件まではアメリカのサイバー・セキュリティのフレーム・ワークであったFISA（Foreign Intelligence Surveillance Act, 外国情報監視法）制定の原動力となったウォーターゲート事件は今なおアクチュアルな問題である（松尾（2019）; 土屋（2015: 56-57））。

第三の謎は、ロッキード事件と結果としての田中角栄逮捕は、アメリカCIAの陰謀なのか？ である。ロッキード事件勃発40周年にあたる2016年、ロッキード事件・田中角栄関連本が多数出版された。なかでも、抜群のベストセラーになったのが、田中角栄自身による独白の形式をとった石原慎太郎著『天才』である。本書はこの年に出版されたロッキード本・田中角栄本のエッセンスを凝縮している。曰く、尋常小学校卒の田中が、保守エリート政治家を出し抜き、高級官僚を手玉にとりながら、日本の高度成長を実現したが、アメリカの「虎の尾を踏んだことにより、「アメリカの陰謀」により、（彼が選挙の際に動かした資金数十億円からすれば）僅か5億円の収賄により、日本司法の枠外の手法により有罪とされた。つまり、このストーリー・テリングは、日本の高度経済成長のシンボルでもある田中角栄首相は、①日中国交回復・日本版資源メジャー戦略・航空機産業自立化など、一定の対米自主外交を行ったが、②その自主性ゆえに「アメリカ・エスタブリッシュメント」の「虎の尾」を踏み、③収賄事件（ロッキード事件）で失脚した（ないし、させられた）とするものである。このストーリーは、戦後日本の対米自主外交へのロマンとその不可能性への自己諦念を、示唆するものといえる（坂出（2017））。

この「2016年のロッキード事件・田中角栄像」は、新たな証言・資料の発掘に基づき、「角栄無罪論」「P3C（ロッキード社の対潜哨戒機）本丸論」へと広がるが、骨格としては、ロッキード事件およびロッキード裁判当時のジャーナリスト立花隆と田原総一郎との対立の構図の延長線上にあると見てよいだろう。立花隆は、1974年、『文藝春秋』に「田中角栄研究—その金脈と人脈」を

連載して以来、田中金脈を徹底して批判した。これに対して田原総一郎は、含意としては田中を擁護する角度から、「CIA（アメリカの中央情報局）陰謀説」を唱えていた。また、落合信彦は、別の角度「軍産複合体＝体制派と、それに闘いを挑む反体制派との確執から生じたのがロッキード事件だった」（落合（1987: 214）と説明している。

ロッキード事件は、ニクソン大統領への資金還流問題を經由してウォーターゲート事件と「金の流れ」で直結している可能性がある。ロッキード社賄賂の日本側要人を経たニクソン政権への「還流」疑惑は、ロッキード事件・裁判時から密かに囁かれてきたが、この点、実態はどうだったのか？ 田中角栄の親しい友人であった浜田幸一議員のサンズホテルでのバカラ賭博をめぐる賭金（損金）が、ニクソン再選資金に還流した疑惑は極めて濃厚である。1973年12月8日、ウォーターゲート事件を調査するためにアメリカ上院「大統領選挙活動調査特別委員会」の公聴会に、ヒューズの所有するサンズホテルの副社長兼総支配人リチャード・ダナーが、カジノから秘密資金をニクソン陣営に運んでいたのではとの疑惑について調査のために召集された。（スタッフの尋問）「あなたは、1968年、大統領選の資金を集める問題で、ニクソンと話し合ったのか？」ダナーは次のように答えた。「ニクソンとレボゾ（チャールズ・レボゾ、ニクソンの「黒幕」で、フロリダのキービステーク銀行頭取）は、ハワード・ヒューズが政治献金をしてくれる可能性があるかどうか、私にたずねた。レボゾは、永年、ヒューズの親会社に勤めていたエド・モーガンと私が親しくしていたことを知っていた。モーガンは、ロバート・マヒュー（ヒューズ系企業幹部）に話した結果、政治献金が得られる見込みがあることがわかった）そして、ラスベガスのカジノの資金を、少なくとも2回、10万ドル、ニクソン側近に渡した」と述べた（Bellett（2015: Chapter 12）; Higham（[1993] 1994: 244））。ロッキード事件は、ウォーターゲート事件の一部として考えられるべきであろう。直接的にも、ロッキード事件の発覚はウォーターゲート事件捜査から生じた。上院ウォーターゲート調査委員会は、疑惑解明の焦点を、ウォーターゲート侵入事件から選挙資金献金に移した。ニクソンの選挙募金主任であったハーバート・カームバックが、委員会で、ノースロップ社会長トム・ジョーンズがウォーターゲート犯人の弁護用秘密資金を準備したとの告白をしたからである。このノースロップ社の選挙献金疑惑からロッキード事件は発覚するのである。

ロッキード事件を検証するにあたっては、これを他の事件と切り離された収賄事件としてではなく、1960-1970年代の他の主要事件との連関で、つまり、ケネディ暗殺・ウォーターゲート事件・C5Aギャラクシー軍用輸送機スキャンダル・英ロールスロイス社（ロッキード・トライスター・エンジン供給社）倒産・国際軍用機疑獄なかで複合犯罪として考えなくてはならない。そのとき、ケネディ暗殺の「悲劇」・ウォーターゲート事件でのニクソンの「愚行」・ロッキード事件での「巨悪」田中角栄という物語は再構築されざるを得ないであろう。さしあたり見取り図を描けば、1950年代の冷戦軍拡と1960年代ベトナム戦争軍拡、アイゼンハワー大統領が退任演説で警鐘を發した軍産複合体なるものの1970年代における清算過程で起こった、アメリカの保守とリベラルの衝突の構図である。

II ケネディとベトナム戦争

ピッグス湾侵攻作戦

1959年1月1日、フィデル・カストロが、キューバ革命で権力を掌握した。1950年代を通じて

数十億ドルの対キューバ投資をしていたアメリカ・ビックビジネスは、カストロ政権のキューバ資産の国有化に激怒した。バチスタ大統領を含む多数のキューバ人がアメリカ、特にフロリダに亡命した。共産主義が西半球に及んだことに危機感を覚え、また好機ととらえたCIA長官アレン・ダレスは、リチャード・ビッセル秘密工作本部長のカストロのキューバからの「除去」案を承認した。3月17日、ダレスとビッセルは、ホワイトハウスで、アイゼンハワー大統領・ニクソン副大統領はカストロ暗殺計画を協議した (Prouty (2011: 122-125);ワイナー (2011a: 282-286))。カストロは、アメリカ企業のキューバでの不当に安く抑えられた賃金の適正化を求めた。さらに、ペプシコーラに対して不利なことに、キューバの砂糖の世界価格への価格上昇を求めた。これは、ペプシコーラの利潤を切り詰める措置であった。ペプシコーラの顧問弁護士としてアメリカ政財界をのしあがったニクソンには由々しき事態であった。ニクソンは、キューバ侵攻作戦 (オペレーション 40) を立案した。1959年5月、ニクソンは、ペプシコーラ・スタンダード石油・フォード自動車・ユナイテッド・フルーツ社及びマフィア代表者と協議し、カストロ政権打倒とその見返りとして、次期大統領選 (1960年) への支持をとりつけた (Furiati (1994: 14))。対キューバ作戦には、ヒューズも深く関与している。ヒューズは、CIAと彼の配下ロバート・マヒューがカストロ暗殺計画を実行することを了承した。同時に、バハマ諸島、フロリダとキューバの真ん中 (キューバの北30マイル) に位置するカイ・サル島をCIAに貸与した。ヒューズは、カイ・サルを、ヒューズ医学財団を隠れ蓑にして所有していた。カイ・サルは、キューバに対する秘密作戦の基地として利用され、また、反カストロ・亡命キューバ人の避難所でもあった。ヨーロッパでのベルリンの壁同様、カイ・サル島は、西半球の共産主義国からの「自由の土地」であった (Higham ([1993] 1994: 199-200, 209))。

1960年大統領選は当初、共和党ニクソンが民主党ケネディに圧勝すると思われた。この当時、カソリック・アイリッシュの大統領がアメリカに生まれるなど、黒人・ユダヤ人・女性の大統領が誕生するよりも困難だったのである。1960年大統領選は、はじめてテレビ討論が実施され (このときのケネディの若さとスタイリッシュさ、弁舌が、彼の勝利にむすびついたことは疑いをいれないが)、キューバ政策とニクソンの資金問題も少なからぬ重みをもっていた。ケネディは、フロリダ州を獲得するためには、亡命キューバ人の票をとることが第一だと考え、対キューバ強攻策を打ち出した。ところが、この問題でニクソンは、ジレンマに陥ってしまう。ニクソンは、副大統領として大統領就任後のオペレーション 40 (キューバ侵攻作戦) をすすめているため、キューバ侵攻をカストロ政権に警戒させるようになるキューバ強攻策をアピールすることができなかったのである (Furiati (1994: 21))。また、ヒューズ資金問題もニクソンの足を引っ張った。1956年の大統領選で、アイゼンハワー大統領・リチャード・ニクソン副大統領が地滑りの勝利を納めた直後、ニクソンの弟ドナルドが、ヒューズの資産を管理するノア・デートリッヒに連絡してきた。ドナルドが経営しているレストランが財政危機に陥ったとのことであった。20万5千ドルをローンで貸してくれと要求してきた。デートリッヒは「私は責任がもてない」とヒューズに話をまわした。ヒューズはデートリッヒに「ニクソンに金を出してやれ」と命令した。デートリッヒは、ヒューズ工作機械のカナダ子会社から20万5千ドル送らせ、ドナルドに手配した。担保は、母親のハンナ・ニクソン婦人が所有する借地 (評価額9万3千ドル) であった。デートリッヒは、このローンは危険だと判断し、ヒューズに相談なく、ワシントンに行き、直接ニクソンに会い、ヒューズから弟ドナルド・ニクソンへのローンをとりやめるよう要請した。しかし、ニクソンは「デートリッヒさん、私

は、私自身のことより家族のことをまず考えるのです」と語った。デートリッヒとニクソンの話は終わった。1960年、JFKとニクソンの選挙戦最終版、このニクソン・ローンの存在は暴露された。大統領選挙が僅差でJFKの勝利に終わった後、ロバート・ケネディは、ヒューズ工作機械のローン問題が、ケネディ陣営に勝利をもたらした三つの出来事の一つであると語った（デートリッヒ&トーマス（1977, 399-405））。

ケネディのベトナム撤退政策

ピッグス湾侵攻作戦は、共産主義独裁者をアメリカが打倒する栄光に包まれた勝利となるはずであった。ブッシュ・シニア、カベルCIA副長官、ハントは、ケネディの承認抜きで作戦を実行しようとしていた。4月15日午前4時（侵攻の2時間前）、カベルは、ケネディに、アメリカ空軍による侵攻援護の承認を求めた。しかし、ケネディは「ノー」と拒絶した。結果、グアテマラで軍事訓練を受けたCIA主導の亡命キューバ人による軍事作戦は無惨な失敗に終わった（第一次キューバ危機）。CIAは15人の死者を出し、1100人の亡命キューバ人がカストロの捕虜になった。CIA史上、空前絶後の大失敗であった。作戦立案者はケネディを深く恨み、また、カベルのケネディへの承認要請に対しても批判が高まった（落合（2013: 260-261）; Prouty（2011: 128-132））。

1962年10月のキューバミサイル危機（第二次キューバ危機）では、ソ連が中距離弾道ミサイルをキューバに持ち込む姿勢を示し、ケネディ政権が海上封鎖で臨んだ。ケネディ政権は辛くも米ソ全面核戦争を回避したが、軍部の対ソ強硬派は、海上封鎖は弱腰だったとしてケネディの対応を批判した。ケネディは、第二次キューバ危機（全面核戦争危機）での米ソ緊張緩和を経て、ベトナムへの軍事顧問団派遣を超えた軍事的介入への慎重姿勢を明確にしていた（1963年9月3日、テレビインタビュー）NSAM（国家安全保障指令）263（1963年10月21日）は、大統領補佐官マクジョージ・バンディがカバーレターを作成し、國務長官・国防長官・統合参謀本部議長に送られ、コピーがCIA長官に送られ、ケネディ政権の公式方針となった。NSAM263は、アメリカのベトナムでの軍事顧問団1万6000人を帰国させることを指示していた。NSAM263は、1963年末までに千人のアメリカ兵のベトナムからの帰国と、1965年末までにすべてのアメリカ兵のベトナムからの撤退を内容としていた。これはアメリカのベトナム介入に終止符を打つ爆弾宣言であった。「これは一部の軍産複合体、金融界、政府の認めることのできないものであった。（それと1964年のほぼ確実なケネディの再選がケネディ暗殺の舞台を作った）」（Prouty（2011: 267））さらには、9月・10月とケネディは安全保障問題大統領補佐官マクジョージ・バンディに米・キューバ双方の国連大使を通じたアメリカ・キューバ間の共存に向けた対話をすすめた。すでに、1964年大統領選挙でのケネディの勝利は確実視されており、対キューバ・ベトナム強硬論者はほとんどパニックに陥った。

ケネディ暗殺と「魔法の弾丸」

1963年11月22日金曜日12時30分、3発の銃弾が、テキサス州ダラスをパレードしていたJFKを打ち抜いた。その内の1発の銃弾は、ケネディのボディを貫通し、リンカーンに同乗していた民主党テキサス州知事ジョン・コナリーに突き刺さった（ウォーレン委員会公式見解）。ケネディの死によって自動的に大統領に昇格した副大統領リンドン・ジョンソンは、すぐさま、ケネディ暗殺調査委員会（ウォーレン委員会）を設置し、調査にあたった。ジョンソンは、大統領就任

後、ただちにベトナムへの軍事介入（戦闘部隊の投入）を宣言し、アメリカは長期にわたる苦しい戦争に突入することになった。落合信彦の説明によると、ケネディ暗殺はCIA・軍産複合体主導の下実行され、FBI（長官エドガー・フーパー）が隠蔽工作を行ったとのことである。そうであるならば、ウォーレン委員会委員に、長官辞任後も依然としてCIAに強い影響力をもっていたアレン・ダレス、CIAの前身であるOSSの元幹部、チェース・マンハッタン銀行会長、また、ユニテッド・フルーツ社（グアテマラの左翼政権転覆に関与）理事であるジョン・マクロイが選ばれていることは、「マッチ・ポンプ」の典型といえよう。また、ユニテッド・フルーツ社のグアテマラの左翼政権転覆におけるCIA側の責任者が、後のウォーターゲート事件で主犯となるハワード・ハントであった（落合（2013: 345-352））。

NSAM263は、大統領補佐官マクジョージ・バンディがカバーレターを作成し、国務長官・国防長官・統合参謀本部議長に送られ、コピーがCIA長官に送られ、ケネディ政権の公式方針となった。バンディのカバーレターは異様なことに、本文を引用しておらず、カバーレターは無価値になった。後に、『ベトナムにおけるアメリカの政策決定過程の国防省報告書』（ペンタゴン・ペーパーズ、1969年1月完成）では、NSAM263は、カバーレターと本文と分離され、研究者を混乱させてきた。「ケネディ政権の文書は残酷に改竄されてきたのである」（Prouty（2011: 269））。後にみるように、ペンタゴン・ペーパーズは、執筆者のエルズバーグ博士によりリークされることになるが、その漏洩された文書すらも既に工作されたものであった。「ペンタゴン・ペーパーズはケネディを悪役として描き、CIAを守るためにつくられた」（Prouty（2011: 276））1963年11月1日、ゴ・ディン・ジユム大統領（南ベトナム）が死亡する。そして、ほとんどすべてのケネディの閣僚がホノルルに飛び、11月20日の会議に参加した。閣僚たちは、そのまま、東京に向かい、11月22日、機中で、ケネディ暗殺の連絡を受けた。ホノルル会議（11月20日）で閣僚たちは、NSAM263と全く正反対のベトナム介入政策（NSAM273）について討議していた（Prouty（2011: 278-281））。

Ⅲ なぜニクソンはウォーターゲート侵入・盗聴を指令したのか？

ハワード・ヒューズとウォーターゲート事件

アメリカ議会でのウォーターゲート・ヒアリングを通じて、ハワード・ヒューズのウォーターゲートへの「関与」は、「ディープ・スロート」（ニクソン政権内の情報リーク者）でさえ、また、この事件で一躍時の人になった二人の記者ボブ・ウッドワードとカール・バーンスタインでさえ触れていない。ようやく1991年6月に、ニクソンのホワイトハウスでの録音テープの検察官バージョンが公開されて明らかになった。ニクソン自身が公表した録音テープからは、ヒューズ関連箇所はすべて削除されていたのである（Higham（[1993] 1994: 286-287））。

「なぜ、ニクソンは、ウォーターゲート・ビル（民主党全国委員会）に『鉛管工』（水（情報）漏れを修理するという意味）を侵入させたのか？」ハイアムの説明によると、ヒューズは当時、民主党全国委員長ラリー・オブライエンが握っていたかもしれない3つの秘密-ハンク・グリーンズパン襲撃未遂事件、ディータ・ベアード-ITT事件、ヒューズ・ニクソン・ローンに怯えていた。1968年大統領選でヒューズから資金を受け取り、その後、ヒューズと手を切っていたオブライエンは、ヒューズ資金の秘密を知りすぎていただけに最も危険な男であった（Higham（[1993] 1994:

282))。

1968年の大統領選挙では、ヒューズは、ラスベガスのあるネバダ州で核実験をしようとしていたニクソン（共和党）、ヒューズとCIA・マフィアの間係を暴こうとしていたロバート・ケネディ（民主党）ではなく、ハンフリー（民主党）を支持し、ハンフリーの大統領選挙責任者であったラリー・オブライエンにロビー活動費として毎月1万5000ドル支払っていた。しかし、その一方で、ヒューズはニクソンの親友レボゾを通じて、ニクソンに少なくとも10万ドルを与えていた。ヒューズは民主・共和双方に資金を融通する余裕があったのである。後のウォーターゲート事件での実行犯ハワード・ハントとゴードン・リディとハワード・ヒューズの接点ができしたのは1960年代後半であった。ハントとリディは、マレン社というワシントンに所在するCIAのフロント（隠れ蓑）カンパニーに所属していた。マレン社は、身体障害者支援のPRを行うとする、CIAのフロント企業であり、また、ヒューズのフロントでもあった。社長ロバート・ベネットはヒューズ工作機械を得意先にしていて、ハワード・ハントは、事件時、依然としてマレン社に勤務し、マレン社社長ベネットを通じてハワード・ヒューズの命令を受けていたのである。この会社は、ニクソンは、ヒューズ資金に依存しながら（あるいはそうだからこそ）ヒューズの弱みを握ろうとしていたのか？ ハワード・ヒューズの資金と人脈の網の中でニクソンがその網から抜け出そうとしていたのが、ウォーターゲート事件の実相かもしれないが、この構図をヒューズの側から見るとつぎのようになる（*Hunt, E. H. (1974: 141-142)*）。

大統領選は、ニクソン（共和党）の勝利に終わること可能性が高くなったので、ヒューズはマヒューを特使としてニクソンに派遣し提携を持ちかけた。この時期、ヒューズは、連邦政府の権限に関わる四つの案件を抱えていたからである。第一に、ヒューズ工作機械の利益のためにベトナム戦争を継続し、軍需契約（特にヘリコプター）において有利な取り扱いにしてくれる「ワシントンの友人」が必要であった。第二に、ラスベガスのデューズ・ホテル買収。ヒューズがこのホテルを買収すれば、ラスベガスの4分の1を所有することになり、独禁法に抵触することになった。第三に、株式売却以降も続くトランスワールド航空裁判。第四に、エア・ウェスト（航空）買収の民間航空局による承認であった。1968年大統領選（11月5日）は、ニクソン（共和党）の勝利に終わったため、ヒューズは、ニクソンとの関係を改めて強化する必要性に迫られ、1968年12月、100ドル札で5万ドルをニクソンに贈ることを決断し、共和党知事会への参加のためパームスプリングに来ていたニクソンに、マヒューから渡すよう命令した。これは超機密行為であった。ヒューズは、ニクソンの親友チャールズ・レボゾ（キューバ系アメリカ人・マイアミの不動産業者・キービスケーン銀行頭取）と関係をもつことにした。レボゾは、リチャード・ダナーと接触した。ダナーは元FBI捜査官で、レボゾをニクソンに紹介した、双方の友人であり、1968年選挙ではニクソンの選挙に従事していた。ヒューズは、ダナーを「ニクソン・リエゾン」に指定した。レボゾは、ヒューズがハンフリーに資金提供しているのにニクソンの選挙に資金提供しないのはなぜ？ とダナーに問いかけた。ヒューズは、ニクソンとレボゾの両者と知己であるダナーに、5万ドルをニクソンに直接渡し、受け取り証にサインすることを命令した。1969年9月、マヒューとダナーは、レボゾに5万ドルを渡した。ヒューズは、1970年初め、デューズ・ホテルを買収するため、マヒューを、司法長官ジョン・ミッチェル（後のニクソン再選委員会委員長）に派遣して、司法省のホテル買収承認を獲得した。その見返りとして、ヒューズは1970年7月3日には、サンクレメンテのニクソンの「西のホワイトハウス」隣家・レボゾの邸宅にもう5万ドルを届けた（計10万ド

ル)。この10万ドルがウォーターゲート事件の直接の原因となる。後(1974年3月5日)、ウォーターゲート特別検察官補佐ステファン・ハバーフィールドは、1970年中に、ダナーからレボゾに3回に分けて15万ドルが渡ったと述べている。1974年6月のウォーターゲート問題最終報告は、「ヒューズのデューンズ・ホテル買収行為は、最高位の行政府の疑わしい行為を示している」と記している(Higham ([1993] 1994: 241-245))。

『ペンタゴン・ペーパーズ』(国防総省機密漏洩事件)

1960年代後半から1970年代初頭にかけて、アメリカは、ベトナム反戦運動・公民権運動・学生運動という三つのムーブメントが重なり合い、奔流となって、「内乱」ともいえる状況に陥っていた。そのプロセスにおいて、1968年3月31日には、ジョンソン大統領が再選不出馬表明に追い込まれ、4月4日、公民権運動の指導者キング牧師が暗殺され、6月5日には、民主党大統領予備選候補ロバート・ケネディが暗殺され、国論は保守とリベラルに二分された。その政治的高揚のなかで、1971年6月13日から、『ニューヨーク・タイムズ』に掲載されたリーク記事「ベトナムにおける政策決定の歴史、1945-1968年」(後に通称ペンタゴン・ペーパーズ)は、ベトナム反戦を核とするリベラルの攻勢を一気に加速させた¹⁾。ペンタゴン・ペーパーズは、ジョンソン政権以来拡大したベトナム軍事介入の実態を暴いた。執筆者の一人、ダニエル・エルズバーグに対して、6月25日、逮捕状が出された。この報告書は、4年前にマクナマラ国防長官が委嘱したベトナム戦争秘密戦史であった。この報告書が暴露されたのだ。ニクソンは怒り、ジョン・アーリックマン補佐官にリークを阻止するよう命じた。ペンタゴン・ペーパーズ問題を何とかしないと反戦運動が都市暴動と結びついて過激化する危険があった。エルズバーグを暗殺することそのものは容易であったが、この措置は逆にエルズバーグを「反戦の殉教者」として神格化することになる恐れが大きかった。7月7日、アーリックマン補佐官は、(情報のリークを修繕する)「鉛管工」チームを作り、そのリーダーにCIAを退職していたグアテマラ政府転覆工作・ピッグス湾事件で活躍したハワード・ハントを据えた。8月25日、ハントはエルズバーグのかかりつけの精神科医(フィールディング博士)の診療所ロスアンゼルスに飛んだ。9月3日、ハントとは、フィールディング博士の診療所に侵入し、エルズバーグのカルテを盗み出した。エルズバーグのペンタゴン・ペーパーズ暴露の意図の解明、また、エルズバーグ裁判の際におけるエルズバーグの心理状態について把握することが裁判に有利に働く可能性もあった。エルズバーグに対する裁判は、翌1972年7月7日に開始された。エルズバーグ被告は容疑が全部有罪となれば(共同謀議・スパイ行為・窃盗罪)、最高105年の刑に科されることになった。このエルズバーグ事件をめぐって全米の反戦グループから裁判費用に対するカンパが寄せられた。この事件の余波は、議会、政府を巻き込み、アメリカ国民の政府不信とベトナム撤退への要求を加速させた(Hunt, E. H. (1974: 148-149, 164-169); 渡辺(1973: 226-228); ワイナー (2011b: 132-133))。

1) エルズバーグは、ケネディ政権においてマクナマラ国防長官が統合参謀本部に提出した米ソ全面各戦争計画についての機密についてもリークをした(加藤陽子「東京下で何が生まれたか」『毎日新聞』2021年12月18日)。ブラウティは、ペンタゴン・ペーパーズについて、「ペンタゴン・ペーパーズはケネディを悪役として描き、CIAを守るために作られた」と記している(Prouty (2011: 275-276); 坂出 (2019b))。

ハントによるベトナム戦争歴史記録改竄

ベトナム戦争をめぐるニクソン政権と反戦を掲げるリベラルの対立は頂点に達していた。その対立は鋭くベトナム戦争の起源—ケネディ政権がベトナム戦争を始めたのかどうかにかかっていた。コルソン大統領補佐官は、ハントに次のように依頼していた。「ハワード君、何というか、ベトナム戦争の起源についての専門家になってもらいたいのだ。前の政権の役人が資料をきれいに片付けてしまったので、われわれがどんなふうにしてあのいやな戦争に巻き込まれたのか、知っている者がいない。ケネディが始めた戦争だということは、君も私も知っている。しかし、大衆、特に新聞はそのことに目を閉ざしている」(Hunt, E. H. (1974: 148)) コルソンは、ホワイトハウスの報道室に国防総省文書があるから、早く調査にかかってほしいと告げた。「調査」を開始したハントは、国防総省文書だけでは限界があるので、国務省の年月順に保管してある電信ファイルも調べたいとコルソンに伝え、了承された。ハントは、1954年からゴ・ディン・ジェム大統領暗殺事件のあった1963年までの国務省ファイルを綿密に調査する仕事に取りかかった。ハントはコルソンに次のように提案した。「電信を、私が偽造したらどうでしょうか。私はワシントンやサイゴンの役人が書くスタイルには慣れていますから、誰でも本当に信じ込むような偽電信文を作れます」9月6日、ハントは偽電信文(2通)を作成した。一通は、ゴ・ディン・ジェム大統領がサイゴンのアメリカ大使館に政治亡命を求めた場合、どうしたらよいか、現地からホワイトハウスに指示を求めた請訓電信、もう一通は、それに対する否定的内容の返電であった。コルソンは、ハントの偽電信文に満足した。これら2通の偽電信は、あるテレビ局がゴ・ディン・ジェム大統領暗殺事件時のCIAからサイゴンに派遣されていたコネイン大佐が出演する特別ドキュメンタリーを制作するにあたって活用され、このドキュメンタリー番組はホワイトハウスから好評を受けた(Hunt, E. H. (1974: 178-182))。

ITTの共和党全国大会(カリフォルニア州)への資金提供問題とCIA・ITTのチリ・アジェンデ政権転覆と

1970年代初頭、西半球では、CIAと共産主義の闘争がクライマックスを迎えていた。焦点はチリであった。1964年のチリ選挙では、CIAは、キリスト教民主党候補エドゥアルド・フレイに300万ドルをつぎ込み、左派のサルバドル・アジェンデを打ち負かしていたが、1970年9月4日の大統領選挙ではそうはいかなかった。アジェンデは、37パーセントを獲得し、勝利をおさめた(ワイナー(2011b: 113-116))。多国籍企業ITT(国際電信電話会社)は、他分野会社買収問題をめぐる反トラスト法違反反トラスト訴訟を抱えながら、CIAのチリ工作に関わっていた。ロバート・ケネディ率いる上院司法委員会(反トラスト問題所管)は、アンチITTの急先鋒として、ITTと連邦政府との反トラスト示談(1971年7月30日)とカリフォルニア州サンディエゴでの共和党大会への献金の関係が焦点として浮かび上がった。1971年春には、ITTの共和党全国大会への資金提供問題が起こった。ニクソンの「縄張り」であるサンディエゴにITTはホテルを建設中であった。共和党にとってもカリフォルニア州の選挙人45票を固めることは重要であった(1968年大統領選挙での勝利・選挙人獲得は僅差であった)。渦中、政権批判の暴露で著名なジャーナリスト、ジャック・アンダーソンが、1972年3月2日、ITTのロビイスト・ディータ・ベアードのメモに基づき、ITTから共和党への40万ドルへの献金について暴露した(Sampson (1973, 196-208))。この「ITT・共和党全国大会事件」はマスコミが取り上げる大事になり、ディータ・

ベアードはデンバーで入院した。ヒューズは、自分と ITT の関係が表沙汰になることを恐れた。ホワイトハウスでのハントの上司チャールズ・コルソン（大統領補佐官）は、ハントに命じディータ・ベアードのメモが「偽造」であるとの「奇妙なドタバタ工作」をした。ハントはカツラと変声装置を持ってデンバーで入院中のディータ・ベアードの病室へ飛んだ。赤毛のカツラをしたつけたハントは病室のベアードを見舞い、2分ごとにホールまで出てきてコルソンに報告の電話をかけた。ハントはディータをワシントンまで飛行機で連れ帰り、記者会見で、あれは自分の書いたメモではないと証言させ、ばったり倒れさせるつもりだった。この時期、ヒューズはニクソン再選委員会に5万ドルの寄付をしており、この資金がハント、リディの工作資金になった（Higham ([1993] 1994: 281-282); ハルデマン (1978: 230)）。

ウォーターゲート事件

『鉛管工』の次のターゲットはオブライエン（民主党全国委員長）であった。オブライエンは、1968年から70年までヒューズのワシントンでのロビーストであり、「10万ドル」のを知っており、マヒューとも親しかったのである。オブライエンが1972年の大統領選挙で、この件を暴露する危険性があった。ミッチェルは、グリーンSPAN襲撃に続く第二の襲撃を裁可した。1972年6月16日金曜日、ハントは妻ドロシー・息子セントジョンら家族とディナー、結果的にこの家族にとっての最後の晩餐、を終え、子供たちにおやすみのキスをして、リディと仕事をして土曜日の朝に帰ると告げて、家を出た。深夜、ハントはポンティアック・ファイアバードに乗って、ウォーターゲート・ビルに行き、地下のガレージに車を入れた。214号室に行き、パーカー、マルチネス、ゴンザレス、スタージェスと合流し、侵入態勢に入った（Hunt, E. H. (1974:237-239)）。

1972年6月17日深夜、CIA 長官ヘルムズに CIA セキュリティ・オフィス責任者ハワード・オズボーンから電話があった。警察がウォーターゲートの民主党全国本部に侵入した男5人（キューバ人4人とジム・マコード）を捕まえた、と。オズボーンは、ハワード・ハントが絡んでいるようだ付け加えた。ヘルムズは FBI 長官代行のパトリック・グレイに電話して、ウォーターゲートに押し入ったのはホワイトハウスが雇ったもので、CIA はなんの関係もない、おやすみ、と告げた（ワイナー (2011b: 135-137)）。

「スモーキング・ガン（物的証拠）」

ニクソンは、ウォーターゲート侵入犯にハワード・ハントが入っているのを知った。ハントは、ニクソンのカストロ暗殺の試みを知っており、最悪なことに、亡命キューバ人の諜報活動の当事者であり、ヒューズとニクソンの関係、ヒューズと CIA の関係をすべて知っていたのである（Higham ([1993] 1994: 287-288)）。以後、ニクソンは事件の隠蔽工作に没頭する。1972年6月23日、ニクソンは、ハルデマン大統領首席補佐官に、CIA を利用した FBI の捜査制限を指示する（この会話（ニクソン＝ハルデマン協議記録は1974年8月5日にホワイトハウスから公表される）。ニクソンは次のようにハルデマンに指示した。「きみが彼ら（CIA の首脳部）を呼んだとき、こう言ってやりたまえ『よく考えてみろ、この事件によって、すべて、『ピッグス湾』の真相（“the whole Bay of Pigs thing”）（Talbot (2016: 496)）がすべて暴露されてしまうことになるんだ。そして大統領はこう考えている』というようなことを言ってから、あまり詳しいことは説明しないほうがよい～それから、全くわれわれと関係がないなどというほど、うそは言わないようにして、これは喜

劇のような誤りだったとでも言っておけばよい。そして、これによって、「ピッグス湾」のことが再び暴露されると大統領が考えていると言いたまえ。それから、彼らは努力しているのだから、そして彼らはFBIと連絡をとるべきだ。この事件にはこれ以上立ち入るのはやめろ（傍点引用者）」ニクソンは繰り返し、「ピッグス湾」暴露を脅迫材料にして、FBIの捜査に圧力をかけるようCIAを脅迫することを指示している。ところが、キューバ侵攻にCIAが関与していたことは、この時点で知らぬものがない公然の事実である。にもかかわらず、ニクソンが「ピッグス湾」という隠語によってCIAを脅迫しえると考えたのはなぜか？ ニクソンは、ケネディ暗殺を「知っていた」のである。この疑問は、「ピッグス湾」がケネディ暗殺を意味していたことを示唆する。ニクソンは、おそらくウォーレン委員会に委員として参加していた側近のフォード（副大統領、ニクソンが大統領辞任後の大統領）とエドガー・フーバー FBI長官のいずれかあるいは双方から聞き及んでいた可能性がある。ニクソン＝ハルデマン協議の記録テープの提出をニクソンが大統領辞任の間際まで拒み、この録音テープがニクソンの政治生命にとどめを打ったことは事実である。さらにいえば、ウォーターゲート事件の実行犯ハワード・ハントは、グアテマラ政権転覆作戦のCIA側責任者であり、ケネディ暗殺当時（1963年）CIAメキシコ・シティ基地に勤務しており、ケネディ暗殺犯（とされる）オズワルドが1963年9月にメキシコ・シティを訪問した際に接触した可能性もある（1975年議会ロックフェラー委員会）（ワシントン・ポスト編（1975: 294）; U.S. Commission on CIA Activities within the United States records (1975)）。さらに、6月26日、ニクソンの法律顧問、ジョン・ディーンがバーノン・ウォルターズ CIA副長官に、勾留中の元CIA関係者6人に渡す口止め料として、足のつかない巨額の現金（100万ドル）を用意するよう命じた。CIAの裏予算から秘密の支払いを許可できるのは、長官ヘルムズ、ヘルムズが国外にいるときは副長官ウォルターズだけであった。もし、この支払いが露顕したら、ヘルムズの投獄とCIA崩壊は免れなかった。ヘルムズは、拒否し、6月28日には、出先の諜報拠点を視察すると称して国外へ高飛びした（ワイナー（2011b: 137-138））。

CIAからの口止め料支払いをウォルターズは3度拒絶したため、ディーンはあきらめ、6月28日、他の筋を当った。ニクソン再選委員会財政副委員長のハーバート・カームバックである。6月29日、ディーンは、ホワイトハウス向いにあるラファイエット公園のベンチでカームバックに会い、「きわめて重要な任務」、すなわち侵入犯のための資金調達と、この受け渡しをホワイトハウスと無関係にしておくために、探偵トニー・ユラーセッツを使うことを要請し、カームバックの了承を得た。翌日、ユラーセッツはワシントンでカームバックから選択袋に入った7万5千ドルの現金を受け取った。この支払いの決定人物は連邦の司法妨害という刑法違反に問われることになるのは明白であった。後のウォーターゲート委員会の記録では、ユラーセッツが現金で21万9000ドルを支給し、15万4000ドルがハントかその妻ドロシーに、さらに2万5000ドルがハントの弁護士ウィリアム・ビットマンに渡ったことが記されている（コロドニー&ゲトリン（1983: 236-241））。

1972年6月から11月の大統領選挙まで、ハント夫妻の口止め料要求はエスカレートした。ユラーセッツがドロシーに払う金額が当初カームバックから渡された金額を上回ったため、ユラーセッツはカームバックから、さらに4万ドル、2万8900ドル、7万5000ドル受け取り、ドロシー・ハントに現金を届けた。この間、ハント夫妻はリディに現金を渡しているが、その際に奇妙なことを述べている。ハント夫妻は、もし事件の「主役たち」がリディとハントに国外に去ってほしいとおもっているなら、ニカラグアへのエア・チケットを用意してもいい。ニカラグアではハン

トの友人であるサモザの庇護下で王様のような暮らしができるであろう、と。「主犯たち」が誰を指すのか？ ハント夫妻の要求のエスカレートにカームバックは危機感を抱き、ディーンの支払い要請を断った。そのため、9月19日以降は、フレッド・ラルー（再選委員会補佐官）が、ハント夫妻への支払いを担当した。口止め料の資金の出所としては、後ウォーターゲート委員会で、ニクソンとディーンの次の会話が記録されている。ディーン「金を調達するのは本当に厄介です」。ニクソン「いくら必要なかね」。ディーン「向こう二年間で、100万ドルかかるものと思われます」。ニクソンは必要ならば現金を入手できるとディーンに語った。「どこで手に入りそうかは知っている。容易ではないが大丈夫だろう」。ハント夫妻の息子ジョン・ハントによれば、ハント夫妻は7月から9月にかけて、ニクソン再選委員会とレボゾを出所とする73万1000ドルを受け取った（コロドニー&ゲトリン（1983: 244-292）; Hunt, St. J（2014, 85-86））。

ユナイテッド航空 553 便墜落事故

1972年11月7日、アメリカ大統領選挙でニクソンが地滑りの勝利で再選される。ハワード・ハントは検察に抵抗していた。10月11日、ハントの弁護士は、ハントが逮捕時に金庫の中にあっただと言っているエルメス製のノート、政府がハントの弁護側に引き渡すよう求めた。これは検察側にとって頭の痛い問題であった。もしエルメス製ノートが提出されなかったら、ハントは、自分の弁護に必要不可欠な証拠が使われなかったと主張することが可能になり、検査当局のハントに対する訴訟が失敗に終わる危険性があった（コロドニー&ゲトリン（1983: 263））。11月15日、ニクソン・コルソン・ハルデマン・アーリックマンは、キャンプデービッドでハントの恐喝（blackmail）について協議した。ミッチェルは、ドロシー・ハントを心配していた。結局、ハント夫妻問題を解決するためにホワイトハウスの資金25万ドルをハントに与え「黙らせる」ことが決まった。しかし、ドロシーは、1972年12月8日、ウォーターゲート事件取材していたCBS放送の記者ミシェル・クラークと面談する予定を立てていた。そして、ドロシー・ハントは、12月8日、ワシントン発シカゴ行き、ユナイテッド航空553便に搭乗した。ドロシーが、搭乗前に、ハワード・ハントを受取人にして25万ドルの航空保険を購入していたのは、自分が何者かに狙われていると彼女自身の諜報員の経験から察知していたことを示す。553便はシカゴ近郊で墜落し、45人の乗客全員が死亡した。ドロシーの遺体のハンドバッグからは、そのうちの何枚かの紙幣はニクソン再選委員会が出所と確認される多額の現金と、アメリカン・エクスプレスのトラベラーズ・チェック200万ドルが発見された（ウォーターゲート航空機事故ヒアリング1973年7月13~14日）。フライト・レコーダーは事故の14分前に停止していた。国内航空事故について何の法的権限をもたないFBIのエージェントが、消防局より早く事故現場にかけつけ、調査を完了した。数日後、ニクソンは、エジル・クロフを運輸省次官に任命した。クロフはNTSB（全米運輸安全局）を監督した。議会・FBI・NTSB（全国運輸安全局）が調査した結果、乗組員の過失による「事故」と発表された。「なぜ彼女は、現金を持ってシカゴに向かったのか？」ハルデマンは『権力の終焉』で疑問を呈している。「侵入犯人たちはワシントンとマイアミで勾留されていたのである。ハントは、イリノイの不動産事業にこの金を投資するつもりだったとの説明もあるが、もし不動産投機に使うような金があるなら、ホワイトハウスから金をとるのにやっきになる必要はなかったろう」（ハルデマン（1978: 313-315）; Hunt, E. H.（2008, 19-21）; Hunt, St. J（2014: 118-123））。

ハント夫妻の息子ジョン・ハントはドロシーの疑わしい死の理由を次のように推量している。

「ハワード・ハントを殺すより、その妻を殺す方が明らかに効果的だった。ハワード・ハント本人を殺すのはあからさま過ぎるし、妻を殺すことによって、黙らせることができたのである。ニクソンは、人をコントロールするためには、その人が最も愛するものをコントロールすればよいことを知っていた。ニクソンは権力を愛し、ハントは家族を愛していた。妻を殺せるということは、子供を殺せるということと同じである」(Hunt, St. J (2014: 96))。1973年1月、ウォーターゲート裁判が始まると、ハントは有罪を認め、「私の知る限り、(中略)上役たちは一人も」ウォーターゲート事件の犯罪行為に関わっていないと証言した(コロドニー&ゲトリン (1983: 267))。

Ⅳ ウォーターゲート事件からロッキード事件へ

ロッキード資金のニクソン再選委員会環流「疑惑」

ニクソンのウォーターゲート資金の出所には、レボゾとヒューズが深く関係している。ハルデマンによると、ヒューズからニクソンに流れた少なくとも10万ドルの現金が、チャールズ・(ベベ)・レボゾのフロリダの貸し金庫に眠っていた。ニクソンがハルデマンに辞職を「要請」した際、埋め合わせに弁護士費用として金を提供しようとした(数十万ドル)。後にハルデマンは、サンクレメンテのニクソンの邸宅であの金はいったいどこから出たのか尋ねた。ニクソンは、「レボゾから出た金だ」と答えた。ハルデマンが、レボゾが持っていたのはヒューズから提供された10万ドルだけではなくたのか質問すると、ニクソンは、レボゾの「チン・ボックス(ブリキ箱)」には、ヒューズの10万ドル以外に、倍の金が入っていたという。たとえば、ウォーターゲート・マネーにそれと知らずに関係していたミネソタの金融業者ドウェイン・アンドリアスが別の10万ドルを献金していたのだという。ニクソンがいうには、「チン・ボックス」には、レボゾ自身の金も、「選挙用政治献金」も混じっていた。「問題の10万ドルのほかに、金庫のなかに、もっと多額の現金が眠っていたことは明らかだ」レボゾはニクソンが必要なときに必要なだけ、金を用立てていた。次に、レボゾの「チン・ボックス」にロッキード事件マネーが入り込んでいる可能性を検証しよう(ハルデマン (1978: 61-64))。

1972年10月から翌1973年1月、ニクソン再選をまたがる短期間に、日本絡みで、謎の事件が頻発する。まず、1972年10月5日、田中と近い間柄にある浜田幸一衆議院議員が、小佐野とともにラスベガスのサンズホテルでバカラ賭博を行い、150万ドル(1ドル=300円として、約4億5000万円)の負債をつくる。後にウォーターゲート事件を調査する上院大統領選挙活動調査特別委員会ヒアリングで、サンズホテル(オーナーはハワード・ヒューズ)の総支配人リチャード・ダナーは、サンズホテルのカジノの収益からニクソン再選委員会に政治献金していたことを証言した(1980年3月6日小佐野ルート公判)。また、小佐野はニクソンの「黒幕」レボゾと知己の関係にある(『赤旗』1980年11月24日;『読売新聞』1976年5月21日)。10月14日、小佐野一行、帰国、コーチャンと再協議(東京)。10月下旬、児玉、ロッキード社日本支社長クラッターに、追加報酬中5億円分をドル小切手払いにするよう要求する(他の賄賂はすべて日本円で受領)。おそらくはレボゾと小佐野・児玉が描いた絵図はこうではないであろうか。ロッキード社から児玉に児玉分・小佐野分合わせて資金が渡り、そのうち、150万ドル分が、浜田幸一の賭博損金として、ダナー(サンズホテル)とヒューズを通じて、ニクソン再選資金に還流する(アメリカでは企業献金が禁じられている)(『赤旗』1980年11月24日「ロッキード資金“ニクソン秘密ルート”を追う

③)。10月24日、田中は若狭全日空社長と会談する（トライスター選定への示唆）。26日からコーチャンはストレスからか腹痛と高熱にさいなまれた。コーチャンには、29日、大久保（丸紅）から電話があった。大久保は、全日空の機種選定がいよいよ大詰めだがと前置きし、「もしあなたが三つのことをすれば、トライスター機の売り込みに必ず成功するでしょう」といった。できるだけ急いで（「できれば朝一番にほしいのだが」）、日本円の現金で1億3000万円を用意することが必要だと伝えた。コーチャンが「そのおカネはなんのために必要なんですか」と尋ねると、「若狭氏に30万ドル（9000万円）と、ほかに六人の政治家に渡すためです」と大久保はコーチャンに伝えた。10月30日、全日空はトライスター導入を決定した（コーチャン（1976: 243-258））。11月2日、ロッキード社財務副部長バロウが、5億円分のドル小切手14枚（10月31日振り出し）を持参し、来日した。クラッターが「小佐野に渡してくれ」と児玉に手渡す。ロッキード社は、1972年11月1日から19日の間に、合計9枚、総額6億1000万円の領収書を出している（『赤旗』1980年11月24日「ロッキード資金“ニクソン秘密ルート”を追う③」；有馬（2013:302））。

12月初旬、小佐野、サンズでの浜田の借金を120万ドルに値切り、米ドルか小切手で4回に分けて支払うと契約する。1973年1月3日、児玉は、自宅で、アタッシュケースに入れた5億円分のドル小切手が盗難にあったとして多摩川警察署に届け出る。立花隆はロッキード裁判傍聴記で、盗難小切手問題について次のように記している。「盗難小切手については、ロッキード社は振出銀行に警告通告措置の要請はしたが、それを無効にするための除権手続きはついにとらなかった」「盗難小切手（実は盗難にあっていない）、その補填分の現金合わせて10億円余の裏金が捻出されて、アメリカに還流したのではないかという。その可能性もかなりありそうである」（立花（1994: 260-261）（傍点著者）1月15日、小佐野による浜田の借金の肩代わり返済が開始される（1回目、50万ドル（約1億5000万円）小切手）。4月28日、小佐野、サンズホテルに2回目の支払い（25万ドル（約7500万円））。5月11～31日、ロッキード社、児玉からの盗難届出を受け取り、14枚のドル小切手（5億円）と同額を日本円で再送金（為替レートの変更により4億4000万円になる）。香港ディーク社から韓国外換銀行日本支店の一ロッキード社口座に振り込まれ、クラッターが引き出し、児玉に手渡す。7月12日、小佐野、サンズホテルに3回目の支払い（25万ドル（約7500万円）、負債残20万ドル）。1973年7月27日、児玉は「日本政府に対するP3C型対潜哨戒機の売り込みに成功した場合の追加報酬（50機以上の確定注文を受けたとき総額5億円を支払うなど）について、秘密コンサルタント契約の修正四号契約を締結した（「児玉ルート検察冒頭陳述」（1977年6月2日（日本共産党中央委員会出版局（1982: 281-295）；有馬（2013: 268）））。

ウォーターゲート事件からロッキード事件へ

1973年9月11日、チリでアウグスト・ピノチェトによるクーデターが起こった。大統領官邸で捕らえられそうになったアジェンデは、カストロから贈られた自動小銃で自殺した。上院議員として初めてベトナム戦争反対を公式に表明した民主党リベラル派の旗手フランク・チャーチを長とする上院多国籍企業小委員会（外交委員会内）が設置された（以下、チャーチ委員会）。チャーチは、1975年、上院政府情報活動調査特別委員会で、CIAの不正を暴き、ウォーターゲート事件以来のアメリカ国民の共和党とCIAに対する不信を背景に、多国籍業の闇を暴くことで大統領への道を探っていた（大森（1973: 118-121）；渡辺（1973: 198-199）；有馬（2013: 320-331））。1976年の大統領選を窺うチャーチの標的はビッグビジネスであった。1972年2月下旬から3月上旬、ジャーナ

リストのジャック・アンダーソンは、ITTの共和党全国大会への40万ドルの寄付と関連づけて、司法省をITTの反トラスト法抵触問題について便宜を図っていると批判した。3月22・23日には、アンダーソンはさらに、ITTが1970年のチリ大統領選挙において、ITTのチリ電話事業の60%を国有化しようしたのに対抗して、選挙に介入したと批判した。3月24日、チャーチは、上院外交委員会が多国籍企業とそのアメリカ外交政策への影響、ITTのチリの内政への介入について調査を開始することを求めた。1973年2月7日、上院にサム・アービン上院議員を委員長とする上院ウォーターゲート特別委員会が設けられた。チャーチ多国籍企業小委員会（以下、チャーチ小委員会）とアービン委員会（以下、ウォーターゲート特別委員会）は、民主党多数議会の共和党政権への攻勢の急先鋒であった。1973年3・4月、チャーチ小委員会は、CIA・ITTのチリ工作について、ヒアリングを開始し、その実態を調査し、その不道徳性・内政不干渉の原則の無視を暴露していった。1973年5月17日には、ウォーターゲート特別委員会のヒアリングが開始された（Ashby & Gramer (1994: 411-417, 430-433)）。1974年1月、チャーチ小委員会は、石油会社—エクソン・モービル・テキサコの共同会社であるアラムコーに標的を転じた。SEC（証券取引委員会）法執行局長スタンレー・スポーキンは事件の展開に関心を示し、企業の秘密資金の浄化を決意した。SECのスタッフの陣容が限られていたため、スポーキンは、企業の自己告発を促した。まず、エクソン、モービルをはじめとした大企業が自社の調査を初め、センセーショナルな「自発的暴露」を始めた（Sampson (1977: 272-274)）。

並行して、上院ウォーターゲート調査委員会は、疑惑解明の焦点を、ウォーターゲート侵入事件から選挙資金献金に移した。ニクソンの選挙募金主任であったハーバート・カームバックが、委員会で、ノースロップ社会長トム・ジョーンズがウォーターゲート犯人の弁護用秘密資金を準備したとの告白をしたからである。委員会メンバーは、ミステリアスなハワード・ヒューズの関与に関心をもった。3月21日には、ニクソンの「親友」レボゾが召喚された。レボゾは、IRS（内国歳入庁（日本の国税庁にあたる））職員二人が彼をキー・ビスケーン（フロリダ州マイアミの別荘地）に訪ねて、尋問したときのことを次のように証言した。職員らは、ダナーが私に10万ドルを渡したかどうか尋ねた。私は「イエス」と答えた。彼らは、「その金はどこにある？」と聞いてきたので、「私がまだ持っている」と答えた。一人のIRS職員が、「我々は、100万ドルの所在を探しに来た。私は、どうやらそれがここにあるようにおもう。おそらくまだ、課税されていないはずだ」IRSは、課税対象外の選挙資金でなく、レボゾからニクソンに渡されたはずの数百万ドルの隠し資金に関心があり、情報をもっていたのであろう（Bellett (2015: Chap. 12)）。チャーチをリーダーとするリベラルのウォーターゲート事件追求を通じて、カストロ暗殺計画・ケネディ暗殺・キューバ侵攻計画の実態、CIAとマフィアの関与が浮き彫りになってきた。ハワード・ヒューズの配下であったロバート・マヒューが沈黙を破った。ヒューズがカストロ暗殺計画にかかわるCIAのための「繊細（センシティブ）な仕事」に関与したと述べたのである（Furiati (1994, 120)）。

1974年7月27日、下院司法委員会は、評決を行い、27票対11票で大統領に対する第1の弾劾（司法妨害）を勧告することを可決した。アメリカ中を敵に回したニクソンはなおも大統領に留まる姿勢を示したが、ニクソンに引導を渡し、ウォーターゲート事件の幕を引いたのは、ブッシュ・シニアであった。8月6日、ニクソン政権最後の閣僚会議に、ブッシュ・シニアは出席し、「ウォーターゲート事件は早急に幕を引かせるべきです」と大統領辞任を要求した。それでも、ニクソンは抵抗を示したが、翌7日、ブッシュ・シニアが辞任要請の書簡をニクソンに送りつける

と、ようやくニクソンは白旗をあげた。8月8日、夜の国民へのテレビ演説で、ニクソンはテレビ演説で、大統領辞任を発表した（越智（2003: 251-252））。

「セネター（上院議員）探偵」 フランク・チャーチ

チャーチ小委員会は、1975年6月10日、ヒアリングを開き、ノースロップ社の秘密資料を公開し、同社のヨーロッパ・中東における秘密代理人の詳細と氏名を明らかにした。トム・ジョーンズは、ノースロップ社の秘密代理人の設置はロッキード社を真似ただけだと、ロッキード社に問題を転嫁しようとした。連邦債務保証とC5Aギャラクシー問題で、議会とマスコミの攻撃対象となっていたロッキード社は、ノースロップ社より「はるかに大きな獲物」だったのである。1975年後半、チャーチ小委員会の調査の焦点はロッキード社に移った。アメリカ政府は、ロッキード社が、最大手の防衛契約社であることから、また、政府が同社に1億9500万ドルの債務保証を与えていることから重大な関心をもった。ロッキード社はSECと議会小委員会に説明することが求められた。レオ・ギャレット SEC議長は、自身が米政府緊急債務保証理事会のメンバーであることから、ロッキード社の案件に携わる資格がないと固辞した（*AWS*T, August 11, 1975, 21-22; September 1, 1975, 19-20）。ノースロップ社理事会は、1975年7月、報告書を公表し、トム・ジョーンズを徹底的に批判した（Sampson (1977: 272); Ashby & Gramer (1994: 453-461)）。1975年8月25日、プロキシマイアーが委員長をつとめる上院銀行委員会は、ロッキード社会長ホートンを召喚した。プロキシマイアーは、ホートンに、ロッキード社が支払った金が、支払われたことや、その金がどこに行き、受け取った日本の高官が誰だったかと問うた。ホートンは、「誰に渡るかは知っていた。代理人との契約に関する限りにおいては、ということです。それが代理人からその後誰に渡ったのかについては存じません」（Hartung (2011: 118)）と答えた。1975年8月、プロキシマイアー上院銀行委員会委員長は、サイモン財務長官に、ロッキード社の海外での秘密工作を公表するように要請した。「私の見方では、この慣習をなくす最も有効な方法は、ロッキード社に資金を受け取った外交政府高官と代理人の名前を公表することである。これによって将来、賄賂を要求しようとする政府高官への強力な牽制となるであろう」（1975年8月27日サイモン財務長官への書簡）。これに対して、サイモン財務長官は、「ロッキード社の財務状態は極めて脆弱で、資金繰りも他社に比べて厳しい状況にある。従って、同社の判断が正しければ、貴君が要求する情報を公表した場合、会社自体が破綻に追い込まれる恐れがある」（プロキシマイアー上院銀行委員会委員長へ）プロキシマイアー率いる上院銀行委員会は、将来の収賄への抑止力として、高官名を公表すべきだと述べたのに対し、サイモン財務長官・彼の管轄下にあるELGB（緊急政府保証委員会）は、ロッキード社の経営への打撃に配慮して、公表阻止の立場をとった（徳本（2004: 121-124））。

1975年9月12日、チャーチ委員会は、ロッキード社に関する第1回ヒアリングを開き、ロッキード社の買収・リポートが、インドネシア・イラン・サウジアラビア・フィリピンに広がっていることが明らかになった。ロッキード社は、サウジアラビアで1億600万ドルの賄賂を支払っており、その大部分が武器商アドゥハン・カシヨギの手に渡っていた。ロッキード社は、当初、疑惑を否定したものの、後に1970年1月からの5年半の間に2200万ドルを支払ったことを認めた。米政府緊急債務保証理事会は、ロッキード社が海外要人への賄賂支払いをやめない限り、政府債務保証停止（ロッキード社倒産に直結）に踏み切ると警告した。ロッキード社は、海外販売に伴う賄賂支払いをやめることを表明した（*AWS*T, August 11, 1975, 21-22; September 1, 1975, 19-20; Sampson

(1977: 274-275); Ashby & Gramer (1994: 462))。

1975年、フランク・チャーチは、多国籍企業小委員会とは別の上院委員会-政府情報活動委員会(CIA・FBI調査委員会)委員長を引き受けた。委員会はカストロ暗殺計画を徹底的に調査した。1975年6月19日上院委員会は、シカゴにスタッフを派遣し、サム・ジアンカーナをワシントンに護送しようとした。ジアンカーナは最大の情報源であったが、彼がワシントンに向かうことはなかった。その晩、彼は銃殺されたのである。委員会ではラスベガスのマフィアのトップ・ジョン・ロセリが政府情報活動委員会に招致され、カストロ暗殺に関する「詳細な説明」を行った。ヒューズを裏切ったマヒューは委員会で証言することになっていた日の数日前(1975年6月24日)、何者かに銃殺された。ロセリは自分は誰がケネディ暗殺を仕組んだか知っていると言っていたが、数日後の1976年8月7日、彼のボディはフロリダのダンファウンディング湾のオイルタンクに浮かんでいた。ロセリの死後、「暴露者」ジャック・アンダーソンは、ロセリが彼の情報源であったことを告白した。政府情報活動委員会報告書は、1959年以来、CIAがカストロ殺害計画を推進してきており、その過程で、アメリカの3人のトップ・マフィア(サム・ジアンカーナ(シカゴ)、サントス・トラフィカント(フロリダ)、ジョン・ロセリ(ラスベガス))と共謀してきたことを記した。三人のボスのうち、トラフィカントだけが生き残った(Furiati (1994: 8, 120-121))。

V おわりに ケネディ暗殺異聞

最後に我々の第二の謎「なぜ、ニクソンは、ウォーターゲート・ビルに『鉛管工』を侵入させたのか?」について、残された疑義を紐解こう。ニクソンは、ウォーターゲート侵入の失敗に際して、ハワード・ハントに100万ドル用意しなくてはならないと考えたのはなぜか? もともとのヒューズからニクソンへの贈与は10万ドル(ないし15万ドル)だったのに、100万ドルは大金に過ぎる。当時の金銭感覚からしても100万ドルは個人として扱うには巨額である。一つの仮説が浮かび上がる。ウォーターゲート(民主党全国委員長オブライエン・オフィス)侵入は、ハントがダラスでのケネディ暗殺の実行犯であった証拠書類(写真)を盗み出すためであったのではないのか? ハントのニクソンへの恐喝のネタはハント自身がケネディ暗殺に関与していたことではないのか? この説を提示したのは私立探偵ポール・カンガスである。カンガスは、ハントともう一人の実行犯がダラスのテキサス少年図書館前で警官に逮捕されている写真を提示した(アブラハム・ザプルーダーがホーム・ビデオ・カメラでダラスのパレードを撮影したフィルムから。1975年公開)。ハントらがグロシー・ノール(ダラスの小さな丘の地名)からケネディを狙撃し、直後、警官に逮捕されたショッキングな写真である。15人の目撃者がいたが、メディアは無視し続けている。この写真はネット上で閲覧することができるが、無論、陰謀論の極みとして激しく反駁されている(Furiati (1994: 14))。

カンガス説はトンデモ説か? 実は、1975年フォード大統領(ウォーレン委員会(ケネディ暗殺調査委員会)委員)の命により副大統領ネルソン・ロックフェラーが組織したケネディ暗殺調査委員会(ロックフェラー委員会)はこの説を検討している。ロックフェラー報告(最終報告)は次のように結論づけている(U.S. Commission on CIA Activities within the United States records. (1975: 253))。ハントは当日ワシントンにいたと証言しており、かれの子供二人と使用人もハントの見解を支持している。ハントの子供二人のうち一人セントジョンは9歳で、彼らの両親が家にい

たかどうか思いだせず、もう一人の子供は生まれていなかった。ハントは彼の子供たちの証言によりケネディ大統領暗殺当日ダラスにいなかったことが確認された、と。デタラメだ。ハント自身、晩年にいたるまで、ケネディ暗殺はジョンソンの指図だと主張すると共に、彼自身は当日、ワシントンにおり、中華食料店で買い物をして、家族のために夕食をつくっており、暗殺はテレビで見たと繰り返し述べている。しかし、当時小学5年生だった息子セントジョン・ロックミュージョンと麻薬の売人になりつつあったが- 2007年の『ローリングストーン』誌で、「親父がキッチンにいたかって？ 野菜を母さんと切ってたかって？ アイムソーリー、そんなことはありえないね」と語っている。彼の母ドロシーは、暗殺時、ハントはダラスにいたと彼に伝えている (Talbot (2016: 497))。

鍵となるのは、飛行機事故で死亡したドロシーのダイニング・メッセージである。ドロシーが所持していた100ドル札のうち一枚の裏には、「グッドラック、フランク (“Good luck, Frank”)」と書かれている。FBIはこの「フランク」をウォーターゲート事件逮捕者の一人、フランク・スタージェスと推測した (Hunt, E. H. (1974: 283))。これは、ドロシーのダイニング・メッセージである。確かに事件関係者で「フランク」といえば、スタージェスしか適合しない (ピッグス湾事件のときの亡命キューバ人フランク・フィオリーナ、事件後の偽名フランク・スタージェス)。ドロシーのダイニング・メッセージは、彼女がシカゴでCBS放送の記者ミシェル・クラークに訴える予定だったウォーターゲート事件の真相を示唆している。サム・ジアンカーナ (シカゴ・マフィアのボス) の弟チャック・ジアンカーナの手記『ダブル・クロス』によれば、フランク・スタージェスはケネディ暗殺の実行犯であった (ジアンカーナ (1997: 437-439))。カンガスの写真によれば、ハントと並んで逮捕されているのはフランク・スタージェスであった。スタージェス自身、後1990年、『サンフランシスコ・クロニクル』に、「我々がウォーターゲートに侵入したのは、ニクソンがケネディ暗殺に関する我々 (ハントとスタージェス) の関与の証拠写真をオブライエンが出版することをくい止めるためであった」と語っている。このことからすれば、ウォーターゲート事件とケネディ暗殺は直結し、ドロシーの遺留品200万ドルの小切手の額 (日本円にして6億円程度) からして、ニクソン再選委員会のファンド35万ドルではならず、ロッキード事件でロッキードから日本要人を通じてニクソンに還流した金額の意味が見えてくるであろう。二人のハワードは、キューバ侵攻作戦・ケネディ暗殺・ウォーターゲート事件で交錯し、異なる道を辿った (Talbot (2016: 495); 坂出 (2019c))。

参考文献

新聞・雑誌

AWST *Aviation Week & Space Technology*

『赤旗』

『毎日新聞』

『読売新聞』

英語文献

Ashby, L. & Gramer, R. (1994) *Fighting the Odds: The Life of Senator Frank Church*. Washington: Washington University Press.

Bellet, G. (2015) *Age of Secrets*. Las Vegas Free Press LLC (Kindle Edition)

- Furiati, C. (1994) *ZR Rifle: The Plot to Kill Kennedy and Castro*. Melbourne: Ocean Press
- Hartung, W. D. (2011) *Prophets of War: Lockheed Martin and the Making of the Military-Industrial Complex*. New York: Nation Books. (ウィリアム・D・ハーティング (玉置悟訳) 『ロッキード・マーチン 巨大軍需企業の内幕』 (草思社, 2012年))
- Higham, C. ([1993] 1994) *Howard Hughes: The Secret Life*. New York: A Berkley Book.
- Hunt, E. H. (1974) *Undercover: Memories of an American Secret Agent*. New York: Berkley Publishing Corporation. (ハワード・ハント (青木栄一訳) 『大統領のスパイ～わがCIA20年の告白!』 (講談社, 1975年))
- Hunt, E. H. (2008) *Bond of Secrecy — My Life with CIA Spy and Watergate Conspirator R. Howard Hunt*. Waltherville, OR: Trine Day LLC.
- Hunt, St. J. (2014) *Dorothy: The Murder of E. Howard Hunt's Wife — Watergate's Darkest Secret*. Waltherville, OR: Trine Day LLC.
- Prouty, L. F. (2011) *JFK: The CIA, Vietnam, and the Plot to Assassinate John F. Kennedy*. New York: Skyhouse Publishing. (レロイ・フレッチャー・プラウティ (和田一郎訳) 『JFK: CIA とベトナム戦争, そしてケネディ暗殺』 (文芸社, 2013年))
- Sampson, A. (1973) *The Sovereign State*. London: Hodder and Stoughton. (A・サンプソン (田中融二訳) 『企業国家ITT』 (サイマル出版会, 1974年))
- Sampson, A. (1977) *The Arms Bazaar: The Companies, The Dealers, The Bribes: From Vickers to Lockheed*. London: Hodder and Stoughton. (アンソニー・サンプソン (大前正臣・長谷川成海訳) 『新版・兵器市場: 「死の商人」の世界ネットワーク』 (TBSブリタニカ, 1993年))
- Talbot, D. (2016) *The Devil's Chessboard: Allen Dulles, The CIA, and The Rise of America's Secret Government*. London: William Collins.
- US Commission on CIA Activities within the United States records. (1975) *Report to the President by Commission on CIA Activities in the United States*. Washington, D.C.: United States Government Printing Office. June 1975. (https://history-matters.com/archive/church/rockcomm/html/Rockefeller_0001a.htm [see 2021.12.21])

日本語文献

- 有馬哲夫 (2013) 『児玉誉士夫 巨魁の昭和史』 (文春新書)
- 大森実 [1973] 『ウォーターゲート事件』 (潮出版部)
- 越智道雄 (2003) 『ブッシュ家とケネディ家』 (朝日新聞社)
- 落合信彦 (1987) 『アメリカの制裁』 (集英社文庫)
- 落合信彦 (2013) 『二〇世紀最大の謀略—ケネディ暗殺の真実—』 (小学館文庫)
- レン・コロドニー&ロバート・ゲトリン (猿谷要訳) (1993) 『静かなるクーデター～「ウォーターゲート事件」20年後の真実』 (新潮社)
- 坂出健 (2017) 「ロッキード事件とトライスター計画 (1968-1981年)」『経済論叢』第191巻第4号
- 坂出健 (2019a) 「軍事と経済の三階層 (国家・地域・国際) —マクナマラ国防改革と F111 戦闘爆撃機計画・C5A 輸送機計画を中心に—」『経済論叢』第193巻第2号
- 坂出健 (2019b) 「時代を映す映画④『ペンタゴン・ペーパーズ』」坂出健・秋本英一・加藤一誠編『入門アメリカ経済 Q&A100』 (中央経済社)
- 坂出健 (2019c) 「時代を映す映画⑤『アビエイター』」坂出健・秋本英一・加藤一誠編『入門アメリカ経済 Q&A100』 (中央経済社)
- サム & チャック・ジアンカーナ (落合信彦訳) (1997) 『アメリカを葬った男』 (光文社文庫)
- 立花隆 (1994) 『ロッキード裁判とその時代 3 1980年7月-1981年12月』 (朝日文庫)
- 土屋大洋 (2015) 『サイバーセキュリティと国際政治』 (千倉書房)
- ノア・ディートリッヒ&ポプ・トーマス (広瀬順弘訳) (1977) 『ハワード・ヒューズ 謎の大富豪』 (角川文庫)
- 徳本栄一郎 (2004) 『角栄失脚 歪められた真実』 (光文社)

- 日本共産党中央委員会出版局（1982）『航空機疑獄の全容 田中角栄を裁く』（日本共産党中央委員会出版局）
- H・R・ハルデマン（大江舜訳）（1978）『権力の終焉』（サンリオ）
- 松尾文夫（2019）「付章 トランプとニクソン」松尾文夫『ニクソンのアメリカーアメリカ第一主義の起源』（岩波書店）
- ティム・ワイナー（藤田博司・山田侑平・佐藤信行訳）（2011a）『CIA 秘録・上』（文春文庫）
- ティム・ワイナー（藤田博司・山田侑平・佐藤信行訳）（2011b）『CIA 秘録・下』（文春文庫）
- ワシントンポスト編（齋田一路訳）（1975）『ウォーター・ゲートの遺産』（みすず書房）
- 渡辺恒雄（1973）『ウォーターゲート事件の背景』（読売新聞社）